

「昭和の教科書(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

昭和の終わりの、2年生理科の教科書・・・その中には、面白そうな題材がたくさんつまっている。その中の、ストローを使った笛づくりを、今の2年生と試してみることにした。

私は、このねらいを子どもたちに話し、一つだけ演示で作って見せたあと、さっそく活動をさせてみた。



ストローの端を押して、少し平らにしたあと、はさみでV字型にカットする。この角度と、切れ込みの深さ(長さ)で、音の良し悪しが決まる。長過ぎても、短かすぎても鳴らない。また、ストローの端をどのぐらい強くつぶしておくかも大切なようだ。鳴らない場合は、前歯で少し噛んだり、少しなめておくと、直後によく鳴るようになることもある。



当時の低学年教科書の記述は、非常にシンプルである。「ふえをつくってならしてみよう」の1行しか説明がない。作り方も、コツも何も書いていない。実は、ここがすばらしいと思う。

下段には「音が 出 ている もの は ふる えて います。しらべて みましよう。」と、これもまた、実に簡潔な学習問題の提起がある。2年生で行われていたこの単元で大切なことは、「ものは操作すると音を出す」と「音を出しているものは必ず振動している」という、二つの事実の関係性である。その二者を、子どもたちが普段触れているものを学習材として、実験で確かめることがねらいである。それを、5つのイラストと、短い文章で提起しているところがすばらしい。しっかりと子どもの好奇心の導火線になっている。

口にくわえる方法も大切で、くちびるを突き出すようなくわえ方では鳴らず、横に引き締めたようなくちびるの形のほうがよく鳴る。オーボエの奏法に似ている。音質はクラリネットに似ているが、発音原理としても、2枚のリードを持った「オーボエ」が一番近い。万一飲み込んでしまわないように、必ず手で持って鳴らすよう安全指導もした。さて、このあとどんな探究や工夫があるだろうか。(つづく)